

解説 ヤナマール、世界のだけれもが

“Conscious Senegalese rap is not dead.” (Keur Gui)

本書は、Vieux Savané et Baye Makeké Sarr, *Yen a marre : Radioscopie d'une jeunesse insurgée au Sénégal*, Paris : L'Harmattan, 2012 の全訳である。

共著者のサヴァネとサルは、いずれも西アフリカ・セネガル共和国のジャーナリストである。二〇一一年の同国に登場した社会運動体ヤナマールの概要を、かれらは本書をつうじ、いちはやくフランス語圏の読書界に伝えることとなった。ただ、いかえれば本書は、ふたりの著者がジャーナリストの使命をふまえて、自国の新たな社会運動をいわば速報形式で一書にまとめたものである。情報の精度や論評の質よりも、配信速度を優先させた結果としてのテキストともいえる。この点を補うために、本訳書では、二〇一一年の発足前後にヤナマール自身が発表した複数の重要テキストおよび主要メンバーのインタビュー記事もあわせて訳出し、これを巻末に「資料」として添えることにした。

面白い読み物にするための工夫でもあろうが、サヴァネとサルの共著は、ヤナマール運動の出現プロセスを、必ずしも順序立てて説いてはいない。また、かれらの価値判断にしたがうだけでは、西アフリカの一国に現れたこの社会運動が、たとえば東アジアも含みこんだ今日の世界状況全般について、いかなる問いを投げかけうるのかという視点を、読者は必ずしも得られないように思われ

る。そこで以下の小文では、ヤナマール運動出現の経緯、およびこの運動にそなわる歴史的意義の二点に記述をしほることで、本篇に先がけた簡略な解説にかえたい。⁽¹⁾

*

二〇一一年六月二三日、セネガルの首都ダカールに、大規模な民衆騒乱が発生した。市内各所で炎と黒煙がたちのぼるなか、とりわけ国民議会に面したソウエト広場とネルソン・マンデラ通りは、一般市民の投石と機動隊の催涙弾が行き交う紛争の場と化した。

騒乱の直接の引き金は、翌年二月の大統領選挙を視野に入れた現職大統領アブドゥライ・ワッド (Abdoulaye Wade: 1926-) が、第一次投票で勝利の確定する得票ラインを従来の五〇パーセントから二五パーセントに引き下げるとともに、アメリカ式のチケット制 (大統領職と新設の副大統領職の候補者ペアを対象とした投票) を導入するなど、現行憲法の唐突な「改正」案を提示したことにある。八五歳 (当時) という高齢による自己の健康問題もふくめ、国内の推計支持率を当時急落させていたワッドは、勝利のハードルを下げて第一次投票での逃げ切りをはかり、かつ子息カリム・ワッドを副大統領に指名することで、「王位継承」の足固めをもくろんでいるとの憶測が、国内外に広がっ

(1) セネガルの「六・二三」とヤナマール／クルギをめぐる以下の記述は、既発表の拙稿 (二〇一三) (二〇一六)、および以下の口頭発表原稿に、一部もとづく。「火について——二〇一一年、ダカール」(A A 研フォーラム、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、二〇一五年三月二日)。「西アフリカと東アジア——映しあう破局と主権の鏡」(日本平和学会二〇一五年度秋期研究集会、琉球大学法文学部、二〇一五年二月二八日)。

た。しかも、大統領職の三選を禁ずる現行憲法にしたがえば、すでに二期を務めた彼の再出馬は許されない。「現憲法は二〇〇一年の発効だから、その前年に発足した自己の一期目は法の拘束下がない」とする、この悪名高き「アフリカの改憲王」の微妙な主張は、一九六〇年の独立以来サブハラ・アフリカでも屈指の安定ぶりを誇ってきた民主国家セネガルの政治的頹廃をきざす徴候として、国際社会にも懸念を与えていた。

たしかに、歴史的騒乱のおきた六月二三日は、問題の憲法改定案が国民議会で可決されるまさにその日だった。ただし、ハイ・ポリティクスの不穏な策動という以上に、市民の怒りの奔出がいに深刻な日常生活の窮状から発していたかという事実は、数日後に国内各地へ飛び火していく一連の蜂起が「停電騒乱」とも称されることで、いつそう明確な形をとった。ダカール市内の住民は、郊外に広がるメガスラムをはじめとして、病院をも例外としない慢性的で大規模な停電状態に、この数年来苦しめられてきた。はたして今回の騒乱で人びとが火を放ち、破壊の主たる標的としたのは、送電停止の張本人でありながら基本使用料の請求書だけは毎月臆面もなく停電被害者に送りつづけるセネガル電力公社の地域支所だった。国内では一時、戒厳令発動の臆測さえ、まことしやかに飛びかったものの、騒乱はまもなく終熄する。市民の広範な抗議行動をこのとき主導したのが、あくまで非暴力の市民的不服従を訴える社会運動体、ヤナマール (YEN A MARRE: 「やんらんざりだ」を意味する仏語) であったからだ。

セネガル西部の地方都市カオラック出身のラップグループ「クルギケウ・グ」のメンバーである「チャット [Thiat]」マシエク・ウマル・シリル・トゥーレ Cheikh Umar Cyrille Touré と、「キリフ Klifou / キリファ」マヒランディン・ムベサン・セック Landing Mbessane Seck が、ダ

カール出身の先輩ヒップホッパー、「フ・マラド Fou Malade」(フ・マラル・タラ Matai Talla)や、若手ジャーナリストのファデル・バロ Fadel Barro、アリユー・サネ Aliou Sanéらとともにヤナールを結成したのは、ダカール騒乱約半年前の二〇一一年一月一六日。ちょうどチュニジアでベン・アリー政権の交代劇が生じた翌日のことである。なかでも、ウォロフ語(セネガル国内で最も優勢なアフリカ系言語)の歌詞に乗せて政府の腐敗と庶民の窮状を激しく告発し、真の民主主義にもとづく市民の自律と主権の自覚を訴えたクルギの楽曲は、街の市場で手に入る廉価海賊版の携帯端末をつうじて急速に拡散し、若者にかぎらず老若男女、多くの国民の心を動かした。既成政党とは一線を画し、非暴力の抗議を貫くよう人びとに訴えるヤナールのメッセージは、六月二三日を頂点とした大規模なデモ行動の継続となって実をむすぶ。かれらがとくに青年層にむけて選挙人登録と選挙権の行使を地道に呼びかけた結果、翌一二年の大統領選ではついにワッドが敗北し、至極まっとうな民主的手続による現職大統領の退場が実現した。セネガルの「六・二三」は、たしかに一時的には都市騒乱の様相を呈したものの、ポスト構造調整期西アフリカにおける市民的不服従の強度を体現した歴史の切断面——本書の著者たちがいう「事件としての革命」——として、当日の事件の記憶とともに、いまなお国内外で生々しく語り継がれる日付となった。

そもそも「ヤナマール/もううんざりだ」という抗議の叫びに多くのセネガル人が賛同の拳を上げ、社会運動の大きなうねりが生じたのは、たんに停電のせいだけでもなかった。市街地のスプロール化にともないメガスラムが拡大をつづける人口三〇〇万都市ダカールでは、下水道のインフラ不全から毎年の雨季に必ずひきおこされる深刻な土地浸水の現象や、ゴミ処理システムの未整備により、生活インフラの次元における住民の日常的生の基盤は、かねて幾重にも掘り崩されてきた。

人間の生存に最低限必要な代謝熱量の平均値、すなわち食糧貧困線から算定されたダカール市の貧困率も、六・二三騒乱の勃発時点で、約二六パーセントに達していた。いいかえれば、市民のほぼ四人に一人が、生の存続に最低限必要な代謝にみあうだけの食費を所得から捻出できていなかった計算になる。しかも、セネガル人一人あたりの平均所得（二〇一一年時点で日本円に換算して八万円強）は、統計上、サブサハラ・アフリカ諸国の平均値さえ下回る数字だった。雇用不足から満足な職にありつけない若者たちは、なんとかして「現状を抜け出 *sen sortir*」そうとして、死と隣りあわせで地中海の荒波を越えようとするあの危険なボートに、シリア内戦勃発のはるか以前から乗り込んで来た。逆に都市にとどまる若者たちは、停電状態が慢性化してしばらく経った時点から、沈黙の狼煙のうちに叛乱を予告するかのように、深夜の路上で自動車の古タイヤを燃やしはじめた。ただし、人びとの生の存続を左右するほどの危機に至った「もううんざり」な現状一切の責任を、国家元首ひとりに負わせる発想は、いささか安易といえないだろうか。すでにふれたとおり、ヤナマールが主導した「六・二三」における直接の指弾対象とは、庶民の生の存続などまったく蔑ろにして専横と腐敗を繰り返してきた現セネガル政府であり、その頂点に君臨しながら今また自己の権力を温存すべく憲法を恣意的に変更しようとする国家元首ワッドであったことに変わりはない。ただし、多少とも仔細に検討すれば、悪行の限りを尽くしたはずの為政者の主体性について、ヤナマールの解釈には一定のニュアンスが垣間見えてもくるだろう。やや先取りしていえば、ヤナマールによる告発の射程が、セネガル一国の事情を超え出た世界性へと繋がれていく可能性を孕むのも、まさにこのニュアンスがあればこそなのだ。

セネガルの政権運営には、ちょうどほぼ二〇年ごとに区切れめが生じてきたため、初学者にも比

較的とつつきやすい。一九六〇年の独立とともに初代大統領に就任したセングール (Leopold Sédar Senghor: 1906-2001) は、高齢を理由に八〇年に引退を表明し、翌八一年に首相のジュフ (Abdou Diouf: 1935-) が大統領職を継承した。そしてセングール以来の与党・社会党による支配体制は、同年に完全複数政党制が導入されたのちも継続した。他方で、サブサハラ・アフリカ諸国の先頭を切って八〇年には構造調整プログラムが同国に導入されたにもかかわらず——というより、むしろ導入されたせいで——、経済成長とそれに伴い上昇するはずだった国内の就業機会は停滞をつづけ、貧困と社会格差の解決は先送りにされた。八八年のジュフ再選にさいしては、政府の無能に抗議する都市暴動も生じている。反体制勢力の旗手ワッドが、青年層もふくめたこれらの社会対立や政治不信を吸い上げるかたちで「ソピ (変化)」のスローガンを掲げ、ついに大統領選に勝利したのは二〇〇〇年のことである。セングールからジュフへの政権交代は一種の禪譲だったのだから、いわばこれが、セネガル独立以来初の「政権交代」を画したわけだ。セネガルにおけるヤナマール運動の抬頭を日本の読書界にいちはやく伝えた勝侯誠が「アラブの春」との関連で指摘するとおり、運動の中心にいたかれら若者たちは「選挙を繰り返しても、政治も生活もほとんどまともな成果を取められず、生きづらさだけが広がった構造調整期に生まれ育った世代」「勝侯二〇一三・一二七」

(2) 「むかしは連中の方がこのアフリカまで出向いて、おれたちを力づくで奴隷船に詰めこむ必要があったけど、いまはおれたちが自分からボートに乗りこんで、命がけでヨーロッパにたどりつこうとするぞまだ。おれたちはそこまでしてんのに、連中は欲しいものをもう手にいれたからって、おれたちを追い返しやがる。それで、おれたちの財産をやつらが欲しいがるときには、おれたちの指導者どもが、諸手ひろげてお出迎えよ」。(本書「資料7」中のチャットのことば「一五八頁」)。

にほかならない。たとえばクルギのふたりはどちらも一九七〇年代末の生まれで、九〇年代末から体制批判の楽曲を発表しはじめた。当時のかれらが告発対象としたのは、ジュフ政権期の腐敗した統治と構造調整プログラムの深刻な帰結であった以上、斬新なオルタナティブとして当時輝きを放っていたワッドの政治姿勢には、少なからず希望を見いだしていた³。その一〇年余りのち、二〇一年のセネガル社会に噴出した「もううんざりだ」の怒りとは、それゆえ生来の悪役にたいする気安い弾劾とはほどとおい、大いなる希望から大いなる絶望への予期せざる急激な転落に由来していたことになる。そもそも、ヤナマルが結成後初の歴史的なマニフェスト「新しいタイプのセネガル人になるために」（本書「資料1」）をダカール市内オベリスク広場で公表した二〇一一年三月一九日は、本書でも冒頭で明記されているとおり、ワッド新政権の船出を告げた一年前のこの日、「政権交代」の三月一九日を記念するデモ行動の一環としてであった。「六・二三」騒乱一カ月後の七月二三日にヤナマルが中心となって実現したデモ集会でも、チャットは一年前の希望と現在の絶望との振幅を決然と超え、オベリスク広場に詰めかけた群衆に向けてこう宣言するだろう。この日の演説内容が当局を刺戟して、悪名高いあの公安組織「DIC (La Division des Investigations Criminelles 犯罪調査局)」に拘束されるわずか二日前のかれが。

一九六〇年に、セネガルはこの世に生まれた！

そして、センゴールがジュフに政権を任せて去った一九八一年に、

セネガルは青年期に達した！

そして、壮年をむかえた二〇〇〇年に、私たちはワッドに権力を与えてみた！

でも、五一歳の成熟した大人となった現在のセネガルは、みずからの憲法が侵犯されるのを黙って見ていてはいけないんだ！⁽⁴⁾

*

セネガルに「六・二三」の生じた二〇一一年という年が世界全体にとって何を意味していたと、ひとはこののち回顧することになるのだろう。

問題ぶくみのその一年を、わたしはダカールで暮らしていた。「オキュパイ・ウォールストリート」の直接行動が大西洋の向こう側で一定期間持続したことや、デヴィッド・グレーバーが新著『負債論』を刊行したことを、当時のわたしは比較的遠くのできごととして受けとめていた。逆に、ほとんど立て続けのような感覚でまともに衝撃を受けたのは、サハラ砂漠の向こうで前年末から生じた一連の「アラブ革命」と日本の「三・一一」の速報映像、そしてここダカールで目の当たりにした、ヤナマール／クルギが粘り強く継続する非暴力直接行動の姿だった。セネガルの「六・二

(3) たとえば本書の記述としても、二〇〇〇年の政権交代にともなう社会運動と二〇一一年のヤナマール運動との連続性を示唆するパップ・アダマ・トゥーレの発言(六九頁)、あるいは「資料3」の苦情文における「政権交代の二〇〇〇年には、夢を見させてもらっていた」という表現(一一六頁)に注目されたい。

(4) この演説部分については、以下のきわめて優れたドキュメンタリー作品でじかに確認することが出来る。Boy Salloum: *La révolte des *Y'EN A MARE**, réalisée par Audrey Gallet, 73m, 2013.

三」が、タハリール広場とフクシマの交叉する場所に発生した何事かではないかという直感がわたしの裡に芽生えたのは、その間たまたまダカールで暮らしていたからという以上に、とくにクルギの楽曲をつうじ、或る重要なメッセージが自分に手渡されたように思えたからだ。

セネガルのヤナマールが、かりに国家元首の専横と腐敗のみを告発する社会運動であったとすれば、ベン・アリーやムバラクといった固有有名に気安く引きつけながら、西アフリカに生じたこの社会変動をアラブ革命の延長線上で捉える解釈も一見可能とみえるだろう。じつさい、チュニジアやエジプトの社会運動と相前後するタイミングで登場したヤナマールを、アラブ革命の域外への波及効果ないしは社会的翻訳の一例とみなすよう促す、現象面での類似点も少なくない。たとえば、直近のデモ行動に関する情報は、セネガルでも庶民にアクセス可能な通信メディアを通じて伝播・拡大した。また、一一年二月以降は、発端のチュニジアを想わせるかのように、ダカールの大統領官邸前で名もなき市民による抗議の焼身自殺が続発した⁵⁾。そもそも、ヤナマールという運動体の名称自体に、二〇〇五年以来のエジプトの「キファアヤ(もうたくさんだ)」を想起することも難しくはないだろう。とはいえ、たとえば二〇一一年当時のファデル・バロが、徹底した非暴力主義をたぬくことで、ヤナマールとアラブの社会変動との相違を際立たせようとしていた事実 [Gaye 2013: 3031] をことさらに俟つまでもなく、「アラブの春」という鏡に映しただけでセネガルの二〇一一年を論評してみせる発想には、むしろ最初から無理がある。むしろそれ以上に重要なのは、二〇〇〇年の「政権交代」の時点で抜本的な社会変革の推進者となることが期待された国家元首ワッドを、恣意と腐敗の源泉と成り果てるまでに類落させてしまったセネガル共和国の一〇年間、あるいは西アフリカの、サブサハラ・アフリカ諸国の一〇年間とは、いかなる世界性に貫かれた時間であった

かを問いなおす視角であるだろう。そしてそのとき、西アフリカにおける一社会運動の出現が、タハリール広場だけでなく、フクシマとも交叉する場に生じた事件であったこと、つまりは同じ二〇〇〇年代の世界性を背景とした、セネガルと日本の、ないしはサブサハラ・アフリカと東アジアの鏡像関係の内実——「タハリール広場」や「ヤナマール」は、ならば当時の日本になぜ生じなかったのか？——が視界に入ってくるだろう。「エネルギー安全保障の国家戦略」などという発想の内側にあえてとどまるとしても、セネガルの「六・二三」で生の存続の危機をめぐる深刻な争点となった停電現象が、日本の「三・一一」とまったく次元の異なる破綻だったとはいえなくなることが分かるだろう。

*

セネガルでワッドが大統領に就任した二〇〇〇年以降、アフリカ経済はかつてなく急激な転機をむかえた。⁶石油やベースメタルなどの資源をアフリカから大量に調達しようとする中国の動きが、すでに一九九〇年代から始まっていたのに加え、イラク戦争が勃発した二〇〇三年以降は、原油を

(5) たとえば、本書「資料3」(二一七—二一八頁)にある次の表現も参照されたい。「わたしは行商人なのですが、あちこちで警察に追われています。ただ生活に必要なお金を稼ぐ場所がほしただけなのに」。付言すれば、『出てゆく』や『火によって』で展開するターハル・ベン・ジェルーンの世界「二〇〇九」「二〇一二」も、生の存続の危機という点で、すでにふれたセネガルの苦境を想起させずにいない。

(6) 二〇〇〇年代アフリカの経済状況については「平野 二〇一三」を参照。

はじめとする鉱物資源の国際価格が全面高の展開になって急騰をはじめた。これを中国の加速するエネルギー需要が牽引する格好となり、先進諸国間では自国の経済成長の死活をかけた資源安全保障戦略のもと、過剰生産、過剰投資、過当競争の動きに拍車がかかるようになった。一方のアフリカは、石油をはじめとした鉱物性資源が輸出額の過半を占める大陸である。その結果、資源価格が急騰した〇三年からリーマンショックの〇八年までの間に、アフリカはそれまでの破綻状態から一転して、年平均一七パーセントという驚異的な経済成長をとげていった。しかも、この時期にアフリカへの投資を拡張させたのは中国にかぎらなかった。南アフリカをふくめた新BRICSの五カ国すべてが参入したかたちで、資源開発、都市開発、エネルギー事業、そしてアフリカで新たな消費者層の創出を見込む携帯電話などの通信事業を中心に、「資本主義最後のフロンティア」へと投資の波が押し寄せたわけである。

ただし、二〇〇〇年代のアフリカ経済に到来した変化が資源価格の急騰に起因していたのならば、おなじアフリカでも資源に乏しい国では、その間に何が起きていたかという点が問われてくるだろう。その点、セネガルはなによりまず、資源国といえない。国内の主たる鉱物資源は、産出量の世界ランクで一八位のリン鉱石にすぎず、天然ガスや原油の鉱床は一部地域で発見されているが、いまだ開発の途についていない。その意味ではまさしく非産油国でありながら、これまでセネガルは、国内電力供給のじつに九割を石油火力に依存してきた事実をまず指摘しておこう。

もともとセネガル政府は、独立直後の一九六一年に、石油産業の下流部門にあたる石油精製公社サール(SAR: Société Africaine de Raffinage)を創設した。さらに、構造調整プログラム導入後の八三年には、電力関連の諸公社を再編し、発電・送電・配電の三部門を一手に扱う総合電力公社セネ

レック (SENELEC: Société nationale d'électricité du Sénégal) を発足させた。このうちサールは、もともと輸入原油を加工した石油製品の域内再輸出をねらって設立された機関だが、セネガル国内の石油火力を稼働させる燃料供給機関としても、セネレックとの連携で重要な機能を担っていた。そしてセネレックには、国民の所得水準にみあった石油価格を維持するための補助金が政府から支出されていた。ところが、この補助金支出がしだいに膨張したため、セネレックは年々債務を累積させていく。国庫逼迫のさらなる悪循環を生み出したのが、二〇〇三年以後の原油価格の高騰にともなうサールの財務破綻である。とくに〇五年以降、売却済の石油燃料に対するセネレックの返済が原油高騰分をカバーできず滞ったため、サールはたびたび操業停止を余儀なくされた。その結果、セネレックにも十分な燃料が渡らなくなり、ついに国内では、〇六年から停電が発生した。サールの財務はその後も悪化し、〇九年時点では国内燃料需要の七割弱にまで石油精製が落ち込んでしまふ。価格管理に要する補助金支出の継続で政府はサールへの支払がさらに滞り、ひいてはセネレックの燃料獲得が行き詰まって国内の断続的な停電状態が慢性化し、二次エネルギー生産にとどまらない深刻な燃料不足が国内の輸送部門にまで打撃を与えるという悪循環がここで定着してしまつたことになる。

苦境の源はそれだけではなかった。仏語圏西アフリカ地域の経済覇権をそれまで握っていたコートダイヴォールが二〇〇二年から内戦状態に陥つたこともあり、セネガルには、主として都市再開発にむけた建設事業と通信事業の投資案件が、国外から次々と舞い込んだ。ただし、投資が流入し、電力需要が「成長」に応じて増大すれば、発電施設の稼働に要する原油を、国庫は当然買い支えられなくなる。はたして国内の電力需要は、騒乱前夜の二〇一〇年までに年平均八パーセントの

伸びを記録しつづけたのに対し、初稼動からすでに三〇年ちかい時が経過した国内の発電施設は、経年劣化のせいでも、本来備わっていた発電能力を大きく低下させていた。国内で異常な停電状態が慢性化し、貧窮した住民の生活を破局に追いやりはじめた一年一月、エネルギー担当相となったワッダの子息カリムは、総額一〇億ユーロ、全四カ年におよぶ国内電力事業の再建案、タツカル計画（タツカルはウオロフ語で「燃えよ」の意）を突然発表する。だがそれは、予算規模からして荒唐無稽なうえに、時すでに遅しとしかいえない、その場しのぎの対応だった。

福島第一原発事故の急報が国際メディアを介してセネガルに飛びこんできたのは、それゆえこの電力事業再建案、タツカル計画の発表直後だったタイミングになる。そしてフクシマの三カ月後に、ここダカールでは「六・二三」の民衆叛乱が現出した。この場合、二つの事件の日付に三カ月の隔たりしかないことは、むろん偶然でしかない。しかも、セネガルと日本は、かたや国連のいう後発開発途上国（LDC）、重債務貧困国（HIPC）、かたやOECD開発援助委員会の有力加盟国として、世界経済の次元でも、ほとんど正反対といえる位置づけにある。だがそれでもなお、セネガルの六・二三と日本の三・一一とのあいだには、エネルギー危機の同時代的な形象として通いあうところがないだろうか。「債務国」と「ドナー国」の立場の差をこえて、エネルギー安全保障におけるセネガルの危機が、日本の危機のおぼろな鏡像となっていなかったか。このうち少なくとも西アフリカの「六・二三」の鏡には、現に東アジアの「三・一一」の姿がたしかに映じだされてもいた。セネガル政府はタツカル計画発表後の一年二月、セネガル川流域または自国領海上に原発を建設するための技術協力協定をロシアとの間で締結した。だが、フクシマの急報で事態は一転する。アフリカで唯一の原発保有国である南アフリカが自国の原発拡張路線を以後も再確認したのとは対照

的に、セネガルは三月末、ロシアとの原子力開発協定を急遽中止する決定を下している。翌四月に開催された域内会議の席上でも、アフリカを「核のゼロ地帯」にするとともに、太陽光発電の活用をめざす旨の決議採択をA U加盟各国に呼びかけようとしていた。当時のセネガルがエネルギー外交と原子力ビジネスのはざままで踏み切った核をめぐる計画とその挫折のプロセスは、たとえ失速中の独裁者が露呈させた右往左往的一幕にすぎなかったとしても、日本との鏡像関係を想像するうえでは、やはり重要である。今日の世界をつらぬく「成長」のオブセクションの中核にあるのは、石油でなければ核、核でなければ石油という思考の隘路にほかならない。セネガルでは「原油を買う金がないばかりに」窮地に立ち、日本では「原発が稼働停止に追い込まれたばかりに」窮地に立ったという違いはあるにせよ、世界等し並みの経済「成長」をマクロレベルで無限に更新するために課された「石油さもなくば核」の強迫的な二者択一のもと、非産油国に到来せずにはいない——いや、旧来のエネルギー輸出国でさえ、原油の可採年数によらず純輸入国に転化しかねない——「成長」の破局を、セネガルと日本の二〇一一年は、それぞれ固有のしかたで、しかし人間の生を破局に近づける点では等しく露呈させたことになるだろう。

*

生の存続の危機をめぐる二〇一一年のヤナマールが、とりわけクルギの楽曲が発した警告は、じっさいこれと同じ次元で、たんなる自国の国家元首や政府への批判をこえ、全世界にまで響く内容 را 帯びていた。

セネガル政府がちょうどBRICSの一角と原子力発電施設の技術協力協定を締結しようとして

いたときに、クルギは楽曲「債務上等」のビデオクリップで、石油と核の二者択一がもたらすグローバルな破局の構図を、挑発的な画像編集で表現していた。このビデオクリップに映し出されているセネガル社会の生の苦境は、ワッド政権の腐敗を生み出した二〇〇〇年代の世界状況を反映している以上、むしろ停電問題にとどまらない。すでにふれた、生活インフラの機能不全にかかわる土地浸水やゴミの惨状、路上で物乞いをする児童の肖像、職のない若者たちを乗せた地中海越えのボートの姿が、アフリカの鉱物資源を狙う「北京コンセンサス」期の国際社会の欲望、狂躁、乱脈ぶりの映像とともに描かれる。しかも、セネガルを含めた西アフリカ諸国全般にとつての二〇〇〇年代とは、都市部の経済「成長」と困窮する農村との分断がいつそう顕著となり、輸入原料価格の高騰から「食糧暴動」が各地で突発した一〇年でもあったし、開発整備事業の資本投入により都市部の社会格差がいつそう可視化されていく一〇年でもあった。セネガルでカネのある場所とない場所の落差を露骨に可視化した形象として映像がクローズアップするのは、自国の独立五〇周年にあわせてワッド大統領が北朝鮮に建立を依頼した、総工費約二〇億円ともいわれる巨大なモニュメント、アフリカ・ルネサンス像であるだろう。⁽⁸⁾

セネガル政府は二〇〇八年の「経済成長戦略」で、「今後一〇年間で我が国のGDPを、一五年間で一人当たりGDPを、それぞれ倍増させる」と高らかに謳っていた。たしかにセネガルは、当時年平均三〜五パーセントの「成長」を堅持していたものの、このときすでに電力供給の財務破綻が始まっていたことは先にふれたとおりである。資源国ではないために、「成長」にともなう国内消費の拡大を反映して、貿易収支も大幅な赤字を計上していた。なにより、債務残高対GDP比が四〇パーセント前後を推移するこの国の現実には、そう易々と変わるものでもない。ならば、ここで

いう債務とは、「成長」という名の虚像のもとで生きるいつたいだれが背負うべき「負債」なのか、ある普遍性を帯びた問いとして、おのずと投げ返されてくるだろう。

ファユ・ヌ・トゥース *Fayou nu tuuss* (ウォロフ語)。On ne paie rien (フランス語)。We pay nothing (英語)。

これら三種の言語による同じ意味の一文を、黒一色のスクリーンに白字で大きく並記したエンディングを予告するかのようには、「債務上等」のビデオクリップは、ある演説の転用から始まっていた。それは、トマ・サンカラ (Thomas Sankara, 1949-87) がブルキナファソ大統領として、一九八七年開催の第二二回OAU首脳会議(於アディスアベバ)で行った有名な演説であり、クルギがクリップにそのまま挿入したのは、つぎの一節だった。社会革命への道半ばにして暗殺されるわずか二カ月前の、サンカラ本人の肉声である。

負債など返済できない、支払えるものなど持つてはいないのだから。

負債など返済できない、債務を負ってなどいないのだから。

負債など支払えない、逆に連中の方こそ我らに負っているのだから、

(7) 曲名を直訳すれば、「いったい何の債務だ? *Bann det?*」ビデオクリップは、「*Keur gu bann det*」などの語句で検索すれば、ウェブ上でも今のところ容易に閲覧できる。

(8) あるいは、立体交差の幹線道をはじめとする首都ダカールの再開発ラッシュと庶民の貧困との乖離を直接の素材とした楽曲としては、* *Coup 2 gueule* * のビデオクリップ (英語字幕版 U.S. version) を、ウェブ上で閲覧されたい。

いかに大きな富を以てしても決して支払えないもの、すなわち血の負債⁽⁹⁾を。

ヤナマールが主導した二〇一一年のデモ行動で、プラカードにしばしば記された「わたしの憲法にさわるな」(本書八頁)というスローガンは、目前の選挙をにらんだ現職大統領ワツドの恣意的な改憲行動に対する抗議以上の深みをたたえていたと、それゆえここで想ってみる必要があるだろう。ヤナマール運動における最大にしてほぼ唯一の争点⁽¹⁰⁾が、人間の生の存続をめぐる危機であったとすれば、けっして抵触してはならないこのときの「わたしの憲法」とは、当のわたしが「なんとか生きていくうえで必要な最低限のもの」(本書「資料1」一〇九頁)をたんに条文上の約束ではなく実質的に保証してくれる憲法のことであり、あるいは逆に、わたしの身に覚えのない「負債」など有無をいわさず撥ねつけてくれる憲法のことでもあるだろう。つまるところ、ヤナマールが争点として明示したのは、耐えがたい生を強いられる者にとつての主権でなければ、主権とはいったい誰にとつての主権なのかという問いにほかならない。「みなで選挙人名簿に登録し、主権を取り戻そう。セネガルにはその価値がある。セネガル人は、われわれのものなのだ。そして「もう明日は来ている」(本書「資料1」一二頁)——そのようにかれらが訴えるときの「主権」とは、一見そうみえるようなありきたりの投票啓発運動の次元を大きくはみ出ていることになるはずなのだ。じつさいヤナマールの思想には、セネガルに固有の問題を追及すればするほど、それがあがる段階で一国のレベルを突き抜け、今日の世界性そのものへの訴求力を帯びていくという特徴が見いだせるかもしれない。たとえばかれらは、きたるべき「パン・アフリカニズム」のあり方についても言及するが、それはAUのような、フォーマルな国際機関が体現するものとはまるで異質なパン・ア

フリカニズムであるだろう（本書「資料7」一五二頁）。むしろかれらにあっては、地理的な「フリカ」や「アフリカ人」に拘束されることのない、いわば世界全体に開かれた「パン・アフリカニズム」が想定されているようにさえみえる。

「アフリカの諺がいうように「ひとは同意できないときには否と言うもの」なのだ」（本書「資料1」一一〇頁）

このように名指される場合の諺の出所たる「アフリカ」を、常識的な土地の名として受けとめたことに、ヤナマールの思想は効力を削がれてしまう恐れがある。

「アフリカは全世界のお蔵とゴミ箱を同時に兼ねてみるみてえなもんだ」（本書「資料7」一五三頁）

ならば、逆にお蔵とゴミ箱を兼ねてしまったような場所は、アフリカであろうがなかろうが、みなひとしく新たな「パン・アフリカニズム」における「アフリカ」にならないだろうか。今日の世界にあって、お蔵とゴミ箱の一人二役から完全にまぬがれた場所たちや人間たちなど、逆に存在するだろうか。アフリカを固有名としてでなく捉えるとき、「パン・アフリカニズム」は、それゆえ世界連帯へと向かう怒りの問いとなるだろう。「同意できないときには否と言う」のが「アフリカ」の慣わしならば、相互に異なる時空を貫き流れてきた、いくつもの「もううんざりだ」の叫び、

（9）この日の演説内容は、テキストとしても確認できる（『Sankara 2007: 398』）。

「ヤ・バスタ *Ya Basta!*」「キファーヤ *Kifaya!*」「ヤナマール *Y en a mare!*」の叫びたちの間に、オリジナルと複製の翻訳関係は見いだせないだろう。「道化たちの命令どおりに動く道化になるのはやめてくれ」（本書「資料7」一五五頁）というチャットの訴えを、エティエンヌ・ド・ラ・ポエシ「二〇二三」のパン・アフリカニズムへと、そして「ヤナマールは、セネガル国民の憤る力をまだ信じている」（本書「資料2」一一三頁）というかれらの信念を、ステファン・エセル「二〇一一」のパン・アフリカニズムへとむしろ奔放に繋げていくことで、個別の主張の奥行を測量していくべきなのだ。

*

本書の共著者であるサヴァネとサルは、二〇世紀のアフリカ社会思想を活気づけた旧世代の左翼とヤナマール運動との違いを、鮮やかな筆致でこう描き出す。ヤナマールを牽引しているセネガルの若者たちにとり、「アフリカ独立後の数十年間で引き起こされた最大の失敗は、奴隷制も植民地化も経験したことのないかために、今日の苦悩の責任がそうした過去にあることを信じさせようと、大人たちがくり返し試みてきたことにある。それはとうもろもない思い違いだ」¹「植民地主義者や帝国主義者を断罪すること」²「…」はなされるべきであったも、かれらが期待するのは、それが自分の日常生活に变革をもたらす行為として示されることなのだ」（本書一八頁）と。ヤナマールのラッパールたちは、旧世代の左翼が理想としてきたような、前衛が英雄的に主導する闘争の形式も、イデオロギー上の真理とされる社会の組織化も、もはや有効とはみなしていない。むしろヤナマール運動にとり重要なのは、「そのつどの政権がいかなるものであれ、悪習は根絶すべきだ」という

シンブルなメッセージであり、同時に失意と不満の殻に閉じ籠もるかわりに「自分の手で解決策をさぐる」ことなのだ。ヤナマール運動がもつ思想的特質を冒頭からこのように読み手へ提示してみせる本書の記述（六頁）は、じつに明快である。

ただし、本書の後半部分、具体的には「管轄領域」の章以降でサヴァネとサルが展開する、ヤナマール批判とも受けとれそうな複数の指摘は、本書が刊行された二〇一二年時点での予測混じりの見解であったとしても、率直にいつて首肯しがたいところがある。なによりそれは、本書冒頭で示されたヤナマール運動の新しさを証し立てる基本的特質と、やや矛盾した批判内容にみえるためである。

第一にサヴァネとサルは、ヤナマールが本来、市民社会の枠内にとどまるべき存在でありながら、まるで政党にとつて代わるかのようにして政治闘争に参入し、「反旗を翻した国民を権力奪取にいたるまでリードする役割を自分たちが担っていると考えているようにみえる」と述べる（本書七二―七四頁）。第二に、ヤナマールは参加型民主主義を旨とする運動体であるにもかかわらず、中核メンバーと国内各地の細胞組織とのあいだには垂直的な上意下達の関係があるばかりで、「近代性に逆行して」いる点、「組織の限界」として指摘される（八四―八八頁）。第三に、二〇一二年の大統領選に関わる運動が一段落した後は、ヤナマールの実質的な運動に停滞が生じており、それに呼応して国内外でのメディア露出に活動の重点が置かれがちになっているなど、運動の先行きも懸念される（九四―九六頁）。そして最後に、大統領選挙でワッドが当選しないように、対立候補のうちでもマツキー・サル（セネガルの現大統領）への戦略的投票を市民に呼びかけるヤナマールの手法が、民主主義の中立的な監視役であるべきこの市民運動を変質させてしまう危険が指摘されるの

だ（九九一—一〇三頁）。

かりにこの運動体が、旧世代の左翼さながらに社会変革を権力奪取と等号でむすぶ発想を維持していたり、民主集中制の悪弊に染まっていたり、実質的な社会運動を蔑ろにしていたり、戦略的投票の甲斐あって当選した政治家とのあいだに特別な関係を結んでいたりしたら、ヤナマールにしてもクルギにしても、この事件としての運動は瞬く間に記憶の彼方へと消え去っていったことだろう。

サヴァネとサルの不吉な予言が事態を正確に把握するものであったかどうかについては、「六・二三」から六年もの歳月が経過した現在の状況から、これを評定するに越したことはない。

セネガルの国政と統治を政界の外部から注意深く監視し、生の存続の危機に抗する社会運動を地道に継続し、それと同時に、国外では破格な規模のパン・アフリカニズムを展望しようとするかれらの活動は、じつさい消え去るところか、ますます勢いを増している。セネガルの六・二三に感化されて、二〇一一年以降の西アフリカ近隣諸国（コートダイヴォール、トーゴ、マリ、モーリタニア、ブルキナファソ）、さらにはガボンやコンゴ民主共和国で立ち上がった同種の市民運動体との連帯がかれらは強力に推進してきたほか、セネガル国内でも、マッキー・サル率いる現政権への本格的な批判に早くから乗り出している。昨年三月には、クルギ結成二〇周年を祝う一大イベントもダカールで開催された。この小文を執筆している二〇一七年七月末現在も、セネガル国民議会選挙の成り行きを監視するヤナマール／クルギの行動が、ウェブ上でさかんに報じられている状況である。サヴァネとサルが本書で紹介していた五年前のチャットの公約は、したがって今日も固く守られているとみて間違いない。

「俺らはずっと見張り役を務めるつもりだ。権力の座につく気はないし、政治的取引をするつもりもない。もし新大統領が、俺らが投票した理由に反する政策を実施しようとしたら、俺らはその政策に必ず抵抗する」(本書一〇二頁)。

これとは逆に、サヴァネとサルによる本書冒頭での肯定的な評価のほうを、現在に至るヤナマルの健在ぶりへと繋げるためには、むしろこの運動がもつ「風通しの良さ」とでも呼べる特質のほうに着目すべきだとわたしは考える。植民地主義や帝国主義への断罪はたとえなされるべきであれ、それにもまして現在の日常へと変革をもたらすような運動でなければ意味がない。ヤナマルを主導する若者たちの思いとしてサヴァネとサルが的確に紹介したこの価値判断には、おそらく二重の意味が込められている。ポストコロニアル状況への理解は現状を省察するうえで不可欠な中継点となるにせよ、二〇〇〇年以降のアフリカでは、破局にむかうまったく新たなフェイズがすでに幕をあげているという深刻な見立てが一方にあるとすれば、ポストコロニアル状況であれ新たな破局の到来であれ、事態の深刻さをただ列挙しているだけでは、人間の生に具わる快活さ、とりわけ人間の生が本来もつ積極的な表現性を、局面打開の運動には繋がられないという含意もそこにはあるはずなのだ。¹⁰⁾

セネガルのヤナマル運動の中枢にヒップホップ・グループ、クルギがいる事実は、その点で今後も重点的に検討される必要があるだろう。¹¹⁾ 特定の社会運動を周囲から支援する表現者(ミュージ

(10) この視点は、とくに最近の小田マサノリとの対談から得られた「小田・真島 二〇一七」。

シャン)がいるというのではなく、むしろ表現者(ミュージシャン)こそが運動体の中核をなすような事例にあっては、表現という行為が市民的不服従の理念を知らしめるためのたんなる手段ではなかったこと、じつのところは表現そのものが非暴力直接行動の内実であったことが、他の事例にもまして明白となるだろう。

二〇一一年のセネガルにおいて、クルギによる表現行為がいかにして一般市民のあいだに非暴力直接行動の表現行為を連鎖させ、結果的に六・二三へ、そしてワッド大統領の退場へと結晶していったのか。その点で注目してよいのは、クルギというグループ名が、ウォロフ語でイエ(家屋/家族)を意味している事実である。この場合のイエとは何のことだろうか。

「イエは、社会のミニチュアだろ。いいこともわるいことも、みんなイエから出てくるだろ。

世界の縮図、マクロとミクロの原理ってやつだね」(本書「資料7」一四四頁)

主体概念の両義性という観点からみたとき、イエという主体は、クルギやヤナマールが重視する「セネガル人」や「祖国」「共同体」なる主体とまったく同じ意味で、排除と疎外の契機を内包した、危うい存在であることは否定しがたい。とはいえ、たとえばかれらのいう「新しいタイプのセネガル人」を、排除が産出されるナシヨナリズムの亜種にすぎないと切り捨てるよりは、腐敗と無気力に抗するモラリテイの別名として捉えた方が、実質的な変革の可能性と、風通しの良い組織論を手に入れられるように、この場合のイエを、家長長制の閉鎖空間のごとく想像するのは生産的といえないだろう。「アフリカ」に暮らす「アフリカ人」でなくとも、ヤナマールのパン・アフリカニズムにはおそらく自由に参画できるように、この場合のイエもまた、クルギの楽曲表現に敏感に感応

できる人間ならばだれでも表現者のひとりとして新たにクルギの一員となりうるような、そうしたイエの連鎖、ないしは徒党の連鎖として想像できないだろうか。⁽¹²⁾

*

セネガル電力公社の建物と、他国の原子力発電所の風景とが、あるいは送電線と核実験の映像が矢継ぎ早に入れ替わるクルギのビデオクリップをわたしは見つめながら、すでにふれたセネガルと日本の鏡像関係を、二〇一一年のダカールに居ながらにして即座に感知せずにはいなかった。その四年後の二〇一五年、アフリカだけには限らないパン・アフリカニズムを実践し、日本で六・二三を再演し、クルギ／イエの一員となり、つまりは表現には表現で応酬し、連鎖から新たな連鎖を呼び込ませる目的で、わたしはクルギを日本に招き、『非暴力の牙』(図1)と銘打った一週間の連続企画を実現した。正しくは真島個人というより、中山智香子を研究代表とする科研費研究課題「統治思想としての〈オイコノミア〉・戦間期・社会経済思想の複合的研究」(15H03163)の共同研究の一企画としてである。研究分担者としては、他に西谷修、土佐弘之、桑田学が参画した。本書の企画も、この科研費研究課題の共同研究の一成果である。

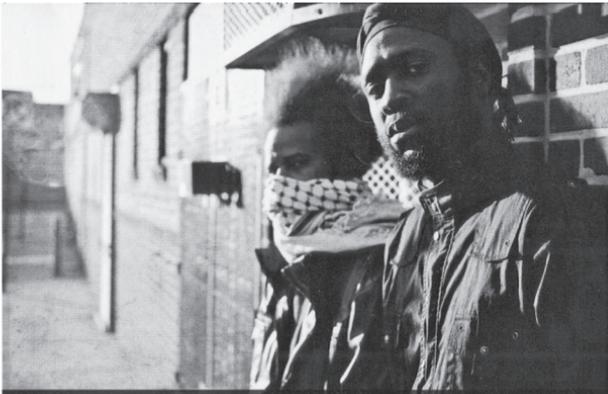
真島一郎

(11) 考察に着手するうえでの予備的な文献は、すでに一定数発表されている。セネガルにおけるクルギ以前の状況については [Herson 2011] [Lock 2005] [Moulatr-Kouta 2014]、クルギのごときは [Appert 2016] [Gueye 2013] など。

(12) 表現者の組織論ともいふべきこの論点については、芸能集団が政治的徒党の祖型にあたることを直観した、山口昌男の初期の思考「一九七二」に影響されている。

非暴力の牙

世界の鏡に照らして
《3・11》以後の思考を脱領土化する



クルギからのメッセージ

セネガルの「ヤナマル」運動、そしてヒップホップグループ「クルギ」を代表して、メッセージを書いています。われわれはセネガルで、大統領が任期終了後の第三期になおもその地位に居座り続けようとしたのに対し、2011年、2012年に役割を果たしたものです。

日本の学生たちの運動に送りたいメッセージは以下のものです。どんな世帯も、自分の国を良くするためにはたらく責任がありますが、若者が運動に関わり、抗議を通じた非暴力の行動に出るとき、よりよい世界が可能になります。抗議やデモを行うことで、街頭の人びとは政治家たちと対話し、インターネットを与える可能性とパワーを得ることが出来ます。市民は非暴力の抗議によって、権力の座にある者たちへ声を届け、自ら信じるもののために闘う意志があると示すことができます。市民はみずからの信念をいつでも説明できるように保持しておき、自国で起きていることに反対する場合には、進んですべてを語るということを、政治家たちは知り、また理解しなければならないのです。

みずからの主義を信じ、メッセージを広めて人びとを復讐、かれらとともにやっつけ、きつとまっくいでしよう。しかしどうか非暴力にとどまり、メッセージが広く人々に伝わるよう、がんばってください。それが運動を進展させるためのもっともよい方法なのです。君たちの闘いが勝利につながるよう心から願ひ、そしてあたたか2、3か月で日本を訪れる際には、ぜひ君たちのうちの何人かと会えることを、とても楽しみにしています。(2015年8月27日 チャットより)

クルギ Keur Gui

アフリカ・セネガルの地方都市カオラックで、社会運動にコミットしていた高校在学中のチャットが、幼なじみの同級生キリア(キリア)を誘って98年、ラップ集団「クルギ」を結成。翌年、初アルバムを発表するも発表後、02年に地元市政を糾弾するアルバム「どいつも服力」を発表。その後、『新しい夜明け』(04年)、『怒れる黒い犬』(08年)の両アルバムで一躍名を馳せ、アフリカ・ヒップホップ賞受賞。現地ジャーナリストらとともに11年1月、社会運動体ヤナマル(もくろみ)を結成。変革的な停戦と雨季の環境的な浸水被害に苦しむ都市部をめぐり、および発展途上地方の現状を、国境した国内政治の中心部にひかえる国際社会の責任を問うとして、道徳・科学する彼らのウェブサイトのメッセージが、ケータイを通じて急激に拡散。青年層にかぎらず若者男女、多くの国民の心を揺さぶった。社会と一線を画した非暴力の大規模デモで、大統領の再選による憲法改訂の阻止を訴えた11年の(6.23)ゲル・ムン・ムン。国際メディアが注目を集めた。民衆の選挙をついた国家元首の早期退場をつながした。チャット、キリアに比べ、今回の初来日ではDJ担当のゼーも同行。

【クルギ2015 来日企画】

※個々の企画参加の予約や詳細については、右記メールアドレスまで御連絡ください。hibouryokunokiba@gmail.com

「非暴力の牙」

11.23 (月/祝) ※入場無料・予約不要
14:40-15:40 **クルギ 野外ライブ**
東京外語大学 外語祭野外ステージ
17:20-19:40 **国際シンポジウム「非暴力の牙」**
東京外語大学 研究課議室226教室
【講演】クルギ (チャット&キリアDJゼー)
【発言】西谷修 / 土佐弘之 / 奥田学 / 真島一郎 / 中山智香子

「社会変革の作り方」

声をあげ行動しつづけないかぎり明日のない土地は、セネガルにかぎらない。クルギと若者たちがどこに語りあひ、その場で新しい今を「作る」。

11.24 (火) 16:00-19:00
東京・馬喰町ART+EAT
https://www.art-est.com/ tel: 03-6413-8049
※予約制 連絡先:hibouryokunokiba@gmail.com

「市民による表現と政治的位置」

社会的危機の時代における表現の方法と意識。そして「書くこと」の政治性とは何か、クルギによる言と映像のパフォーマンス実践も紹介。

11.26 (木) 17:30-19:30 (若手変更の可能性あり)
仙台・センダイコーヒー(カフェ)
※予約制 連絡先:hibouryokunokiba@gmail.com

「ヤナマル、新たな非暴力のかたち」

11.28 (土) 09:30-12:00
沖繩・琉球大学
【出演】阿部小流 / 西谷修 / 土佐弘之 / 真島一郎 / 中山智香子
【関連企画】
11月29日(日) 沖繩・焼肉コボライブ「ヤナマル」



非暴力

の牙

*Bare your fangs of nonviolence
Montrez vos dents de non-violence*

ライブ&国際シンポジウム「非暴力の牙」

2015.11.23 (月/祝) *入場無料・予約不要

14:40-15:40 クルギ 野外ライブ

東京外国語大学 外語祭野外ステージ

17:20-19:40 国際シンポジウム「非暴力の牙」

東京外国語大学 研究講義棟226教室

公開ワークショップ「社会変革の作り方」

Keur Gui (クルギ)と話そう」

11.24 (火) 16:00-19:00

東京・馬喰町ART+HEAT

<https://www.art-east.com/> tel: 03-6413-9049

※予約制 連絡先: hbouryokunokiba@gmail.com

公開ワークショップ「市民による表現と政治の位置」

11.26 (木) 17:30-19:30 (若干変更の可能性あり)

仙台・センダイコヒー(カフェ)

※予約制 連絡先: hbouryokunokiba@gmail.com

日本平和学会シンポジウム

「ヤナマル、新たな非暴力のかたち

西アフリカ社会運動体の訴える成長の破局、生者の主権」

11.28 (土) 09:30-12:00

沖縄・琉球大学

【関連企画】11.29 (日) 夜 沖縄・爆発コロポ・ライブ「ヤナマル」

世界の鏡に照らして

≪3・11≫以後の思考を脱領土化する

社会変革の新たな波動を牽引する

ヒップホップ集団≪クルギ≫

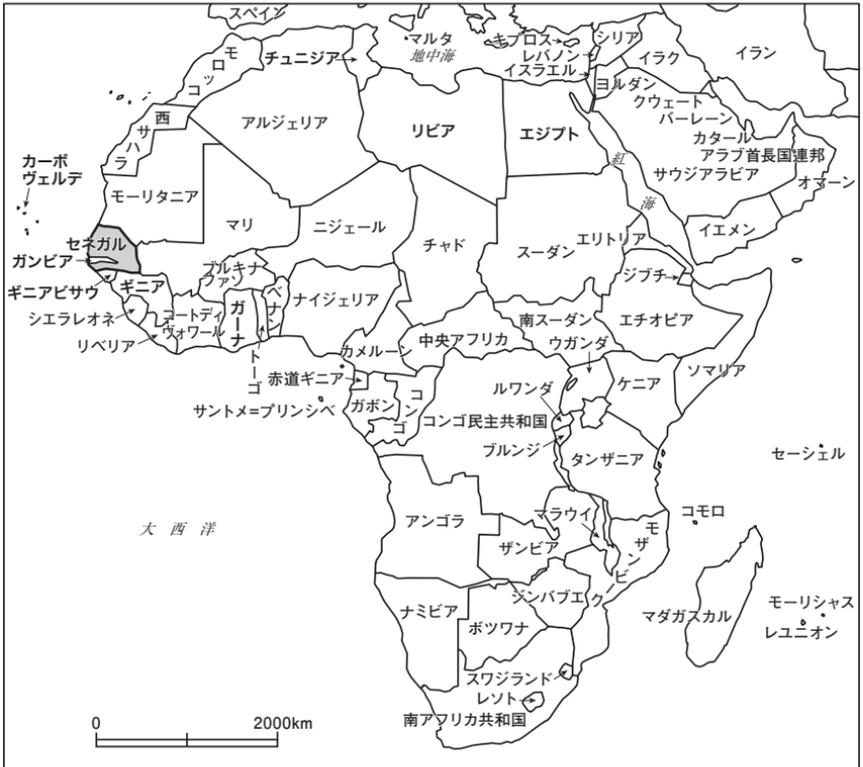
セネガルより来日!

【文献】

- Appert, Catherine M.
2016 "Locating Hip Hop Origins: Popular Music and Tradition in Senegal", *Africa*, 86 (2): 237-262.
- Gueye, Mamane
2013 "Urban Guerilla Poetry: The Movement Y'en a Marre and the Socio-Political Influences of Hip Hop in Senegal", *The Journal of Pan African Studies*, 6 (3): 22-42.
- Herson, Ben
2011 "A Historical Analysis of Hip-Hop's Influence in Dakar from 1984-2000", *American Behavioral Scientist*, 55 (1): 24-35.
- Lock, Katrin
2005 "Who is listening ? Hip-Hop in Sierra Leone, Liberia, and Senegal", In M. I. Franklin (ed.), *Resounding International Relations: On Music, Culture, and Politics*. Palgrave Macmillan, pp. 141-160.
- Moulard-Kouka, Sophie
2014 "Le regard entre deux rives: La migration et l'exil dans le discours des rappers sénégalais", *Cahiers d'Etudes africaines*, LIV (1-2), 213-214: 415-449.
- Sankara, Thomas
2007 *Thomas Sankara parle : La révolution au Burkina Faso 1983-1987*. New York: Pathfinder.
- エセル スニフマン
二〇一〇 『怒れ！ 憤れ！』「村井章子訳」日経BP社。
- 小田マサノリ・真島一郎
二〇一七 「対談」ファー・フロム・ザ・フィールド・オブ・アフリカ『思想』一二〇：七―三八。

勝俣誠

- 二〇一三『新・現代アフリカ入門——人々が変わる大陸』岩波新書。
- 平野克己
- 二〇一三『経済大陸アフリカ』中公新書。
- ベン・ジエリン、ターハル
- 二〇〇九『出てゆく』[香川由利子 訳] 早川書房。
- 二〇一二『火によって』[岡真理 訳] 以文社。
- 真島一郎
- 二〇一三『鏡像のエネルギー危機——セネガルから』『SEEDS』八：六八―七二。
- 山口昌男
- 一九七一〔一九六三〕「徒党の系譜」『人類学的思考』せりか書房所収、一五五―一七〇頁。
- ラ・ポエシ、エティエンヌ・ド
- 二〇一三『自発的隷従論』[西谷修 監修、山上浩嗣 訳] ちくま学芸文庫。



アフリカ大陸



セネガル

セネガル関連年表

- 1959年1月 隣国仏領スーダン（現マリ共和国）とマリ連邦を形成。
1960年6月 マリ連邦がフランスより独立。
8月 クーデタ未遂によりマリ連邦崩壊。セネガル、マリがそれぞれ独立国となる。

センゴール政権（1960-1980）

- 1962年 初代首相ママドゥ・ジャの更迭
1963年 憲法改正により議会制から大統領制へ
1966年 他政党の活動禁止、セネガル進歩連合（UPS）の一党体制へ
1968年5月 学生・労働組合による反政府運動
1974年 ワッド、セネガル民主党（PDS）結成
1976年 制限つき複数政党制へ
1980年 センゴール引退表明

ジュフ政権（1980-2000）

- 1980年 IMFによる構造調整政策の導入
1981年 完全複数政党制へ
1988年 大統領選挙後ジュフの再選を契機に反政府暴動へと発展
1989年 セネガル・モーリタニア紛争
1995年 PDSとの連立政権が誕生し、ワッドが入閣

2000年3月19日政権交代ソビ

ワッド政権（2000-2012）

- 2007年 ワッド再選
2011年 1月16日 ヤナマール結成
6月16日 大統領チケット制法案の緊急閣議決定
6月22日 ダニエル・プロティエ文化センターでの集会にて、翌日の決議阻止のために国会前ソウェト広場での大規模集会が呼びかけられる。
6月23日 ソウェト広場をはじめとする全国での民衆の抗議運動 M23
| 法案は取り下げられる。
7月25日 クルギメンバーのチャット、セネガル犯罪調査局に拘束される。

選挙人登録「ダス・ファナル・キャンペーン」

↓

- 2012年 1月26日 大統領選立候補者締め切り
1月29日 憲法評議会による候補者の確定。ワッドの立候補承認。
2月26日 大統領選第一回投票
3月25日 第二回投票

政権交代

サル政権（2012-）
